

演題番号：C3

## 猫ヘルペスウイルス1 (FHV-1) 感染性肺炎を生じた猫の一例

○尾形真佑<sup>1)</sup>，石塚友人<sup>2)</sup>，小山田希充<sup>1)</sup>，久本真也<sup>1)</sup>，長谷川哲也<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 加古川動物病院 <sup>2)</sup> VES 合同会社

1. はじめに：肺炎は肺実質の炎症と定義され、非感染性または感染性の原因で起こる可能性がある。FHV-1感染はウイルス性肺炎の原因となりうるが、その報告は少なく、詳細については不明な点が多い。我々はウイルス性肺炎が強く疑われる症例に遭遇したため、その経過について報告し、FHV-1感染性肺炎の可能性について検討した。

2. 材料および方法：症例は1歳3か月齢の雑種猫、咳、膿性鼻汁を主訴に来院した。来院時、体重は4.1 Kg、体温38.8℃、呼吸回数は36回/分で、吸気性の努力性呼吸を呈していた。X線検査で肺野全域に散在性に辺縁不鮮明な結節状の間質パターンを認め、血液検査では白血球数およびSAAの著増を認めた。当初、由来不明の感染性肺炎として治療を開始したが症状改善が乏しかったために、機械的人工換気治療を前提として第5病日に全身麻酔下でCT検査を実施した。麻酔下で重度の肺拡張不全を認めたことから、低酸素リスクを避けつつ試料採取を目的として盲目的に気管ブラシ採材を行った。

3. 結果：肺CT検査において肺野全域で気管周囲に浸潤性の間質性肺炎所見が認められた。気管ブラシ試料では好中球が優勢に鏡検されたが、細菌および真菌は培養検査でも検出

されず、RT-PCR検査においてFHV-1遺伝子が単独で検出された。機械的人工換気による陽圧換気治療によっても症状改善が認められず、第12病日に斃死した。剖検後の組織学的所見では感染由来を疑う慢性肺炎とされたが、特殊免疫染色は実施できず原因微生物の同定はできなかった。同時に実施した微生物同定検査では*Klebsiella pneumoniae*が陽性だった。

4. 考察および結語：死後に検出された*K. pneumoniae*は広く自然界に分布して口腔内にも常在し、組織所見で細菌が検出できなかったことから生前の病態に関与していなかったと考えられる。同様に他の感染因子関与の可能性が低いことから、本症例の原疾患はFHV-1による慢性肺炎と除外診断され、CT検査所見から経気道感染による伝播が疑われた。FHV-1は典型的には鼻炎、結膜炎が主な症状であるが、本症例の長い臨床経過からFHV-1が重度の肺炎を引き起こす可能性が示唆された。猫上部気道感染症では肺炎に発展する危険性があることに注意し、鑑別診断に加える必要があると考えられた。